

JACTFL 第7回シンポジウム「外国語教育の未来(あす)を拓く」

分科会報告 2

「外国語教育の多様化の実現に向けて」

分科会 2 実践報告(1)

北川 郁子

本分科会では、外国語教育の多様化の実現に向けて、北海道大学、宮崎大学、金沢大学で行われている VR、YouTube などの活用や留学生を講師とする自主講座の展開等について大変興味深い実践報告がなされた。以下にそれぞれの発表の骨子と質疑応答を報告する。

1. 「中国語シニア学習者と留学生の国際世代間協働によるキャンパスガイド作成」

発表者: 杉江 聡子(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院)

1.1 研究背景

日本では現在、地方都市もインバウンドや外国籍住民の急増に伴い、言語環境の国際化が急速に進展している。北海道大学のある札幌市では、中華圏からの訪日客や留学生が年々増加し、日常的な中国語コミュニケーションの機会が増えている。生涯学習として、中国語を長年学習し国際交流に熱心に参加するシニア学習者も多い。しかし交流の機会は限定的でボランティアによる日本語学習支援や観光イベントの通訳等、多くは単発で一方向的な支援である。

1.2 目的

本研究は、中華圏の留学生と中国語シニア学習者の国際世代間協働を通じた北大 VR ガイドの開発を目的とする。グループ交流を通じて双方の視点を交換しながら、日中対訳のガイドブックを作成する。さらに、ガイド本を活用した VR 映像コンテンツを開発する。

1.3 方法① 国際世代間協働を通じた北大ガイドの企画

- ・ 参加者: 日本人シニア 8 名+中華圏の留学生 5 名
- ・ テーマ: ①札幌農学校と新渡戸稲造、②北大キャンパスに見るアイヌ文化と北海

道の食文化、③北大精神とキャンパスの変遷、④サクシユトコニ川に沿って

1.4 方法② VR コンテンツの開発

キャンパスガイドのモデルコースを設計し、夏と秋の 360 度映像を撮影・編集した。VR ゴーグルで視聴。

1.5 結論

シニア、留学生へのアンケート結果から、次の点が明らかとなった。

日中対訳により表現の類似・相違に気づきシニア、留学生双方の理解が深まった、中国語の聴力訓練になった、日本の伝統建築や敬語について学べた等の語学面での利点の他、北大の歴史と開拓精神、歴史と建築物の特徴の関係、中華圏の若者の習慣を学ぶことができた、など総じて本実践は、言語交流や商業的観光情報の収集にとどまらず、観光と多文化交流とを掛け合わせた、複合的な「共創の場」として機能したといえよう。

1.6 今後

世代、言語、文化背景の違いがあるからこそ、主体的な学び、高いモチベーションをそれぞれが持つことができたのではないか。今後も VR 作成のような使命感や貢献度も満たされるツールの活用も含め、複言語主義的なアプローチを続けていきたい。

1.7 質疑応答

一口にシニア学習者といっても、中国語学習歴のレベルや年齢もさまざまと思われるが、どういう方々がいるのか。

年代は 50 代から 70 台位まで確かに幅がある。中国語学習歴もさまざまで、一年未満もいれば、10 年以上、学生時代やっていたという方もいたり、家族のルーツがあるという方もいる。きっかけはそれぞれ違いがありさまざまだが、社会人クラスに参加していた人が比較的多い。

2.「動画と YouTube を用いた「学び」の共有と発信」

—宮崎大学フランス語科目の実践—

発表者：清水 まさ志(宮崎大学 語学教育センター)

2.1 動画制作でめざすこと

2015 年度から宮崎大学で、発表者が担当する全学対象基礎教育 1 年次後期選択科目「総合フランス語 1」において、最後の期末試験課題として、学科ごとにフランス語の課題曲を歌って録音した音源に、大学と地域をアピールする映像をつけた動画制作を行っている。「総合フランス語 1」は、全学対象基礎教育 1 年次前期必修科目「初修外国語」の履修者が継続して学び、フランス語の初歩を教科書に沿って学ぶ内容が主であり、動画制作を学習目標とする科目ではない。動画制作は、語学学習を通してチームワーク、プレゼンテーション等のコミュニケーション能力を高めるアクティブラーニングの試みである。また地域貢献型大学の課題である、地域との関わりを語学教育に導入する試みでもある。さらに学生が制作した動画を発表者の YouTube チャンネルに置いて公開することで、クラス内の「学び」を多くの人に発信して共有し合う試みである。

2.2 動画制作による学習効果

スマートフォン世代に属する学生にとって、動画制作は難しそうだがやってみたい、全く知らなくてもソフトに慣れれば一通りは誰もが作れる課題である。また制作過程において学生が自主的に行う課題であるため、授業外の学習時間の確保にもつながる。評価の面では、制作し提出することを評価基準とし、クオリティーを競うことを重視してはいない。

前期の必修科目から継続的な視野で学生を導き、後期の選択科目において動画制作を実現していく授業設計と成果、そして問題点などを以下に述べる。

2.3 動画制作の具体例と教育的効果

MV(ミュージックビデオ)型式: 歌(フランス語学習) + 映像(地域学習)

総合フランス語 1(1 年次後期選択科目)の期末課題を取り上げ、実際にフランス語を使ってどのように動画制作に結びつけているのか、具体例を紹介する。これは、グループごとに、フランス語の歌を歌った音源に、地域を取材した映像をつけて宮崎 PR 動画を制作するというものである。その利点は以下ようになる。

- ・ 歌を通して授業内の語学学習を生かせる。
- ・ 学習時間数が少なくても取り組みやすい。
- ・ 1 曲の長さが決まっており制作の労力が大きくない。(歌詞の例として「Let It Go」フランス語バージョンが配布された。)

- ・ 映像の部分に地域学習を取り入れることができる。
- ・ 学習言語と学習者、地域の特徴を表現することができる。
- ・ 学習成果を形にして、他者に発信し共有できる。
- ・ グループワークを通してコミュニケーション能力が育成できる。

2.4 4年間の実践を通しての成果

学生の感想より以下のようなことが成果としてあげられる。

- ・ グループとして1つの課題をやり遂げ、他のグループの成果も分かち合い、語学の授業に達成感と満足感をもたらす。様々な学部の学生と交流ができる。宮崎という地元への愛着が生まれる。
- ・ フランス語圏の人から YouTube に反応があったり「いいね！」がつくことにやりがいを感じる。

2.5 今後の課題と展望

- ・ 歌の部分のフランス語の発音のクオリティを上げるための工夫が必要である。ふりがなをふった歌詞をただ歌うだけでは向上しない。
- ・ 評価：学生の投票では映像編集の面白さで評価しがちだが、YouTube で公開すると歌のうまさが高評価につながる。
- ・ 選曲：学生がメロディーを知っていて、歌詞がフランス語のものが少ない。
- ・ YouTube のチャンネル運営：広く発信したいが危険は出来る限り避けたい。著作権への配慮も必要である。
- ・ アーカイブ化することで過去の資料を簡単に参照できるなどの利点がある YouTube を活用した実践方法は、フランス語に限らずあらゆる言語教育に応用でき、今後ますます大きな可能性が期待できると考えている。(YouTube アカウント名: masashi shimizu)

2.6 質疑応答

宮崎大学は第二外国語は必修なのか
— 独仏中韓の4言語からの必修選択である。

3. 「英語教育と複言語教育の一体化」

発表者: 粕谷 雄一(金沢大学)

3.1 複言語主義教育の教育法を構築する

発表者(フランス語文化が専門)は、日本の外国語教育における「間言語理解」(intercomprehension)の意義について、これまで主にフランス語教育関係の学会等の場で、研究発表や実践報告を行ってきた。本発表では、英語教育と複言語教育の一体化、世界の主要言語をそれぞれ独立したものとはせず、むしろ連続したものと見ることを学ぶならば、従来のものとは根本的に異なった教育法が構築できる、という観点から、金沢大学での複言語主義教育の実践例について発表する。

3.2 多言語教育の理念と実践

まず最初に、「外国語の本当にできる人は異文化とのしなやかな共生ができる人でなければならない」という複言語教育の原点ともいうべき視点が示され、その理念のもとに行われている金沢大学での多言語教育の例が示された。

金沢大学では、2008年に国際学類が新設されて以来、派遣留学希望者が急増した。多言語を学ぶ動きも出てきていて、2013年度には発表者の協力で、トルコ語とアラビア語の自主講座が相次いで開講した。英語以外では、中国語やフランス語、韓国語、ドイツ語などが開講されているが、学生の関心はその他の言語にも広がっていて、その背景には時事の動きに敏感な学生たちの旺盛な好奇心がある。自主講座の講師を務めるのは、トルコやアラビア語圏からの留学生たちで、英語を媒介言語として講座は進められている。

フランス文学演習(人文学類科目)のクラスでは、フランス文学との関わりにおいてベトナム文学を扱うクラスを設けた。ベトナム語のマスターは難しくても、文学に少しでも触れた学生は、ベトナムの人々に自然にリスペクトを抱くことが期待される。

また、「アフリカ概説」という講座では、「アフリカ系の音楽を通じて知る現代の世界」というテーマで、日本語をメインにして英語を補足的に使いながら、アフリカを知り、世界の音楽界で圧倒的な存在感をもつアフリカ系の人々に、好意と尊敬の念を抱けるようなアプローチをしている。

ヒメネスのスペイン語による散文詩『プラテローとわたし』を読むクラスでは、テキストを原語および仏語、独語、英語その他の訳で読み、各言語の比較対照を行い、「ある言

語の学習は、他の言語の学習を秘めている」ことを学生たちに実感してもらう試みをしている。

3.3 多言語教育の未来は教員の創意工夫が鍵

学校のカリキュラムには限界があるが、既存の授業、講座の中で、「1 つの国には 1 つの国語が存在する」という「常識」を是正し、「諸言語は繋がっている」ことを学生に理解させる必要がある。その工夫は、複言語教育に力を注ぐ教員なら、さまざまな手法を用いることで、誰にでも挑戦できるものなのではないだろうか。

3.4 質疑応答

トルコ語やアラビア語の自主講座が行われているということだが、講師の留学生への謝礼はあるのか。

— 全くのボランティアで無給でやっている。

(神奈川県立岸根高等学校)